

## 第三等

二  
三  
四  
五  
六

平山蘆江

紙屋と蕎麥屋の横に路次がある。

溝板を中にして兩側向ひあうたる長屋造り、時は朝日の温かに井戸の側の桃の芽ざしに照りつけて、往來に聞こゆる飴屋が太鼓も、もの暢かに聞きなさるゝ。井戸の横なる板壁におつとりと當つたる日南をしほに張物板三つばかり立て掛け、身は姉さん冠りの目鼻立美しい女房の襷甲斐々々しいのが立ちかゝつて居る。

一枚を張り終へて、つと腰を伸したまゝ、濡れたる手を其儘に額に寄せて、忙しく手拭をもれて落ちる遅れ毛

を甲に押へながら、

『鶯が鳴いてるよ。』

と立つた姿。

『お精が出来ますとね。』

相長屋の古女房が通りかゝりざまに見かへつて行く。

『は。』とつゝましく會釋して、徐ろに又他の一枚の張板を引寄せ。つと伸ばした手は襷にくつろげたれば、雪とばかりの艶かさ。

『叔母さん何してんの。』

八つばかりの切り下げる髪の大人しげな娘が駆け寄つたので、

『清いちゃん？』

『張物してんの？ 叔母さん、好いもの上げませうか。』

『なあに。』

『あのね好いもの、當て、御覽なさい。』

あどけないもの、云ひやう。此路内に子供が總べて六人居るが女の子とては只此一人なので、却つて大人に泥んじで人見知りをしない、家は此女房が家の隣家、殊の外此叔母さんが好なので。誰にもあれ（清ちゃんの好きな人は誰れ？）と聞くものがあると（お隣の叔母さん）と立ろに答へるのである。世を早うしたのか、此子の母も父も居ず祖母なるものが一人で育て、ゐるので、近所の噂では父と母は何か譯あつて逐電したともいふが其祖母なるものも深く秘して誰れにも云はず、孫として育て、る様子、早五十に手の届く年柄で濯ぎ洗濯、裁縫に彼此口を糊して行く瘦せ世帯。

『何だらうね……お菓子でせう。』

『厭だあ、叔母さん見たんだもの、いやだあ。』

『さあ當つたから頂戴な。』

『だつて見てなら誰でも當てるわ、清ちゃんだつて當て、よ。』

『はゝ、悪かつたね、ちやあ叔母さん貫へなくつても證方がないわね、清ちゃんが呉れないからどうしやう。』

『叔母さん、あげてよ。さ、皆なあげるの、叔母さん好い子だから。』

『おほーー、それぢや今度は叔母さんが清ちゃんに上げませう、さ。』

『ひ、え、いらなくつてよ、清ちゃんね、叔母さん一番好きよ。』

『さう、叔母さんもね、清ちゃんが一番好き。』

中腰に張物の手を止め、清しい目にぢつと見る。近く寄り添て、櫻に縫めし袂をなぶりながら、清ちゃんは又見返す様子。



ね、昨夜縁日行つたの、叔母さん麗だわね、ウ、何だの種々なものがあつてよ、縁日綺にちつて。』

『叔母さん何にも知らないの、清



\*人者、清ちゃんの手を引いて近寄る。『張物ですか。』『え、清ちゃんに。』と云ひかけ事ね、叔父さん。』たが『貴郎、今日はお役

『けふは休みなんですよ。』

『あらさう。』

男の方は何やら曇れがましき様子に、只女の巧みに動く手許を見入つてゐる。

『叔母さん、ね、あたい、畫を書いて貰つたの、好いのを、あのね、お嫁さん。』

『さう、だれに。』

『叔父さんに、ね叔父さん、上手だわ、叔母さんも畫を描いて頂戴な。』

『叔母さんなんぞにや書けなくつてよ。』

『嘘よ。』

『おやもう午砲だわ、清ちゃん、あとで往らつしやいな、貴郎御免なさい。』

折しも張り終へたる板を日當りに置きなほして、盤を提げながら男に會釋して後影うつくしく歸つて行く。

『叔父さん又書いて頂戴な、え叔父さん。』

握つてゐた手を引かれるので、ふと氣が付いたやうに『あゝ』とばかり。黒うはえた日に薄雲がかゝつて、何となくおつとりとなつた。

## —

『やい、いま歸つたよ。』

日も早暮々の燈火洩る、格子戸をつと開きぎまに、『おとは、居るのかい。』

間どほりの庭を上ると、半ば開いたる障子を手荒く押しあけてすつと通る。

『お歸り。』と氣さくに立つて迎へる女房は、『いまお膳を出しますよ』と甲斐々々しく立上る。

『ヘン今出しますよも無えもんだ、亭主の歸る時分はちやあんと氣を付けて、据膳で待つてろい。』

『まあ、好いやね、私だつて其位の事はして置たいんだけど、お前さんのやうに出たら最後、いつ歸るか分ら



ないやうぢや、手のつけやうが無いぢやないかね、一所にでも喰べやうと思つて待つてたんですよ。歸る早々劍突も好加減になさいよ。』

『何だと、劍突もいゝ加減にしろ、ぬかすない、亭主には亭主の用があらい、女房に今日は何時何分に歸りますから飯の用意をしといて下さいつて頼んでゆく奴があるかい、晝歸らうと夜歸らうと大きにお世話さ。女房

てえものあな、何でもへゝゝして亭主のいふ通りにするもんだい。何かといふと口答へばかりしやがつて……。』

『又飲んできたね、管あまくのも大概におしよ。』

『何でえ此畜生、亭主が自分の口で自分の腹ん中へ酒を飲むのがどうしたんだい。』

『まあ好いつてばさ、ほら此通り膳立てもして置いたんだよ。』

『まあ好いつてばさ、ほら此通り膳立てもして置いたんだよ。』

『まあ好いよ、私が悪かつたんだからよ、サおあがり。』

『知れつたこつたい、何ぞと云ふと……。』

『まあ好いつてばさ、ほら此通り膳立てもして置いたんだよ。』

『まあ好いぢやないかね、いつまでも男らしくもない、大概にお默んなさいな。お一杯お飲みよ、女房のお酌だから。』

飽くまでも行届いた女房が仕業に、何といふ事も出來ず、誰々に盃を取ると引つかけ／＼三盃まで息もつかず。

『まあ、さう急いで飲まなくても好いちやないか……。』

『黙つてやがれ。』と德利を引奪ぐつて續けざま。

『まあ、どうしたつてんだらうね、呆れつちまうね……もうお止しなさいよ、又困つちまふからさ。……あら、まるで饅名坊が施行にでもあつたやうに、ちつと女房も献して下さいよ。』

つと目を据みて睨めたが、ちょっとと氣を變へて『お、これわ、己が悪かつた、さ、呉れてやらあ、グツと呑めグツと、不景氣な面あ仕てやがらあ、さあ、もうひとつだ。』

『あら、お前ぢやあるまいし、そんなに飲けるものかね。』

『ウンニヤ承知しねえ、手前の方から云ひだしやあがつて、いけねえ〜。』

無理にも徳利を差し付ける、此方は盃を引いて徳利を押へやうと手を伸ばす、押し付ける支へる、拂ふ拍子にバッタリと徳利は落ちて膳の上、けた、ましい音がして膳なる盃は、二つになつて割れたのである。

『やい、何しやがんでい、手前何だなわ、亭主を馬鹿にしやがつたなあ、イヤサ踏付けにしたな、この面へ泥を塗つたなあ〜。』

『何だねお前、自分で落としたんぢやないか、馬鹿にするも何もないぢやないか、ま、私が悪いんだから勘忍してお呉れよ、此んな皿一つ位明日買つて來とかあね。』

『ヘン、皿は買やあ済まうけどもな、亭主の面に塗つた泥は何うして呉れるんでい。』

『おや可笑なことをお言ひだね、皿を割つたのが何して泥を塗つたになるんだい、たはげも好加減におしよ。』

『何だと、誰がたはげにしたい、誰が亭主をたはげにして下すつたんでは、さ、何にも云はねえから出てうせい。』

『何だね、出しぬけに出てうせいつて、今日は餘程どうかしてよ、まあ、い、から勘辨しておくれよ。』

『喧しいやい、手前の胸に聞いて見ろ、誰が何と云ても承知しねえ、竹五郎が承知しねえ、さ、去り状だ。』



『おや、どうしたつてんだらうね、皿を割つた位で女房を去る奴が、何處にあるものかね。』

『まだツベコベ云つてやがるな、出られなけれあ、摘み出してやらあ、手前はな、此竹五郎の目を盗んで間男をしやがつたなあ。』

『えツ、間男ツ、まあ、馬鹿な、何で私が、ハア分つた、又誰か水でもさしたんだね、好い加減に馬鹿におなんなさいよ。』

『おつと、さうは云はねえ、證據人があらあおい竹公、確りしなくつちや不可ねえよ。』

戸口にでも覗つてゐたのか、頬冠りを取つて這入つて來た男、竹の背後に突つ立つた。

『おや吉さん、又お前さんおせつかいに内のを突つ付いたんだね、詮様がないぢやないかね、根も無いことを

……。』

『否や、云ふまいぞ〜、根がないとは云はないと、向ふの相澤には今日何しに行つて居つた?、さ、何だつて亭主の留守の中に男の所に、而も獨身者の家へは入りびたつて居たのだ。』

『え、あれが何だね、清ちやんが……。』

『えいッ、清ちやんが知つた事かい、手前が出来合つてゐるんだい、野暮は云はねえから出て行け、ヘン男一人の所に行つてやがつて何を仕やがるか分るもんかい。』

『違えねえ、おい竹、待てよ、今手前が追ひ出したからつて阿魔の方に腹は愈るだらうが、野郎の方の怨みは

晴れねえせ、此様圖々敷奴等だから、追ん出した好いことにしやがつて、鼻ツ先で何様座山戯た眞似をしやうも知れねえせ、其時になつてから下さらねえなあお前さ、これあ、ちつと考えもんだぞ、えツおい。』

『成程ツ、それも左様だ、ぢやあ何だ、これから押しかけて行つて野郎にも耻面かはかして謝らして、なあお

『さうだ〜。』

『ま、有りもしないことを、私はまだしも、どんなに八ヶ間敷なるかも知れないやね。』

『へ、あれだもの、惚れた男は可愛だらう。』

『さ、來やがれッ』と引つ立てる。

『あ、おいでには及びません。』と表に人聲がして、「御免なさい」と入つて來たのは外ならぬ相澤愛次郎。

『あら貴郎。女房は清しい目を見張つて目守る。竹と吉は顔見合はして何やら笑ひあふ様子。』

今しも時計は九時を打つた。

三

『お前さんよくも女房をお取んなすつたね、よくも間男をしやがつたね、えおい、二才如何して呉れるんだい。』

『ま何て人だらうね、貴郎どうぞお免しなすつて下さい。何だねお前さん、何時間男……。』

『何よりこの吉藏が證據だ、亭主の留守の間に女房を呼び込んで、二人で喰附いてりや、なおい。』

『さうよ、この俺様が通りかゝつて見てるとも知らねえで、晝日中あんまり見つともよい姿ぢやあ無えせ。』

『いや、其れはお二人が何と言はれても仕方がないが、決して左様な譯ではないので、子供と遊んでゐた所に

お神さんがお通りかゝりになつたのを、清ちゃん、其子が無理に呼び止めたので……。』

『フン子供つてえ奴あ何にき知らねえもんさなあ。』

『黙つといでよ、吉さん、不用な事を告口して相澤さんはどんなに御迷惑かも知れやしないやねえ。』

『黙つてろい。』

『まあ、其處へ持つて來て私は持病が急に起つて生憎婆やは使に行つてゐるす、御親切に介抱して下さるので、つい其様折ではあるしおとはさんのお手を借りた計りなんで。』

『理窟を付けられあ、どうでも付かあねえ、へッ。』

『おいお前さん、お前さんの言草あそれで済まうがね、夫れぢやあ少つと義理が悪からうせ、ね、物の譬がね

他所の畑に生つたものを盗んで置いて口の端あ拭つて知らぬ顔でるのは、それあお前さんあんまり好い仕業ぢやなからうせ、な、俺わ知らねえが李下の冠とか云ふ事もある、其んな白をきらねえで間男したなら仕たといつちまひねえ、何の此様根性の腐つた女、へッお餘り位は呉れてやらねえものでもねえや、なあ。』

『あ、左う疑はれてはどの様に辨解しても無駄なこと、と云つて此方にこれといふ反證はなし、兎に角私が悪かつたのぢやから、おとはさんには決して不都合はない、私が謝罪ますから。』

『何の貴郎、もとく私が貴家さまへ上つたのが悪いのです、お謝罪なさることが、殊に常々人の悪い……いや人には有中の御病氣の事ではあつたし、つい御介抱申してゐたものの吉さんが見なすつたし、尙々疑ひはないといふ事知れてあるのにあの邪推、これには何か企みの……イヤ大した事でもない、竹さんお前も滅多なことを。』

『イヤナニ、兎に角私が謝罪ます。』

『おい／＼たはけも休み／＼お言ひなせい、他の物を盗んで見咎められたからつて謝罪あ、済むと云ふなああんまり虫が好すぎやうせ、借りたものを返すにもお禮といふことはするもんだせ。』

「それぢやあ、どうすれば好いつて云ふんだ。」

『どうすれば好いんだ？ おいく少つと心も動かしねえ、木偶ぢやああるめえし、手の入つた唐偏木だ、間男料を出しねえ。』

『えッ。』

『まあ何て人だらねえ。』

#### 四

いつも悪黨のあの吉さんがつまらぬ事に尾鰭を尾けてそゝのかすし、殊に内のが何時にない悪邪推、何か譯の  
あるらしいと思つたが、扱こそ呆れ果てた仕方、御名を大切に又、御優しく言葉を返されぬあの大人しい相澤様なればこそ、黙つて十圓といふお金を出しやすつて、穩便にお済ましなすつたもの、あゝお氣の毒な、構はぬとはお云ひなされたもの、明日からは顔もわはせられぬ、あゝどうせう、とばかりおとはは蹴散かして止めるも聞かず出て行つた夫のあとに、根もゆるんでばらくに頬れかゝつた髪を上げも得せず上り端の柱に寄つて、

『チョッ愛想も、こそも盡きつちまふわ、ま、何うしやうね』思はずも獨り言つのである。

『どうしても黙つてはゐられない、今がら行つてお詫をして來やうかしら、いや、其様事をして又竹さんが知つたら、どんな云ひかけを爲やうも知れず。如何したものかと兎つ置いつする思案の果てしなくがつくり俯向く拍子、ふと目に付いたは何やら。』

『おや、お金だわ、お、今のお金だ、其れぢや竹さんが落して行つたのに違ひはない、あ丁度好都合だ、是れなりとも返しませう、何のあとで聞いても知らないと云つて済ます分のこと、さうしやうく。』  
嬉し喜んで女の嗜み髪など、ざつと撫で上げながらつい一足の向ひ家、相澤が家の軒下に行むだのである。  
夜はやうくに更け渡つたる十一時、空に星の數さへもしみぐともの寂しい、春とは云へどこやらに鳴く猫の聲さへ身にしみるやう。  
愛次郎は豫てより何としもなくおとはが容姿美しと見るにつけ、あの悪さげな竹五郎に朝夕邪慳に扱はるゝが愛しく、差出たる事ながら折あらば慰めてやりたいと思うてゐる中、今日清ちゃんが呼んだを幸、呼び入れて話をしたのがつい斯様なことになり差し當つて云ひ明さん事もならず、只身の耻をあかるみへ出ださん事が厭な計り、おめくとせしめさせたのは兎も角、あの女にも難儀をかけたのは我ながら誤りと未だ寝もやらずにゐたる折、表に訪るゝ人あるにつと立つて、

『誰？』と伺へば『私。』とばかり。

『お休みですか。』と入つて來るはおとは、

『や、何卒お上んなさい。』と坐を定めて、

『只今は眞に申譯もござりません、も何卒私に免じてお許しなすつて。』

今更にかう向ひあつて見れば胸まづ込み上げて出る言葉もなく、じつと相手を見れば色白の飽くまで品の好き顔の思ひなしか沈んだる容姿に、又しても氣の毒な思ひのして、  
『どうかお腹立のないやうに、毎はあゝでもないのですけど酒を飲むと、もう困つちまふんですよ……』何と云つて可いかと俯向くに、ふと愛次郎は見やりながら、  
『なんの。』と計り打ち消す、もの、閑寂として只二人さし向ひ、濃い睫毛の切れの長い目を伏目に、幾筋となく亂れて落ちる髪を上げもやらず居るさまの殊にも艶かなのに、何とはなく心ときめいて、

「其れに付いて貴郎に……」云ひかけた折しも、手に取るやうにと、家を留守にしやがつて。家中を驅けあるく様子、忘れた金を探しに戻つたのでもあらう、廳て戸を繰る音がして足音は此方へ近寄る。『やい手前達あ、未だ凝りねえなあ。恐しき見脳に二人が前へ突立つて、又しても悪体づくのである。』又かい、お前、其様に女房に間男をさせたいのかい、人様に難癖つけてお金を詐つてさ、それで博奕の資にもしのだらう、止してもお呉れよ大概に、愛想もつきてしまはあね。』

『何だと、ほざきやがつたな、阿魔、今度こそは去つたぞ、畜生。』  
『は、去られませうとも其様人非人に去られたつて恰度好いや、此方から去つてやらわ。』

『まあ待ちなさいよ』と相澤は止める。『奴、手前からだ』と急き立つ機に、養立つた鐵瓶を眞逆様『あれ。』と留めやうとしたおとはの手は却つて仇に竹五郎は蒸氣の中に倒れたのである。

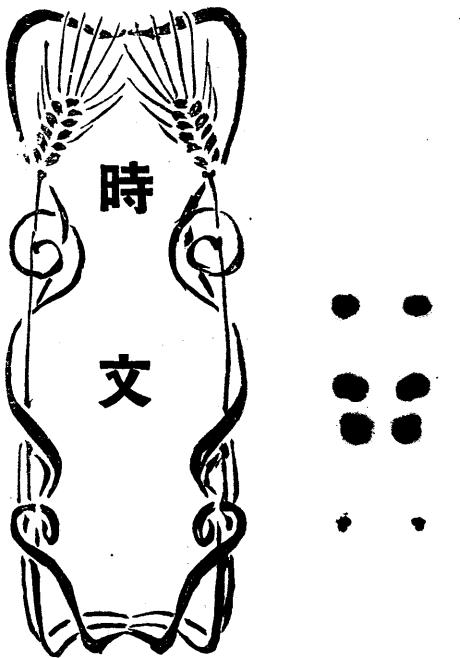
『おとはさん。』『愛次郎さん。』今更何と取返しは付かぬ、え、儘よ何事も憂世の中と、情に追つた一人の頬には、熱い涙。

『おとはさん。』『愛次郎さん。』今更何と取返しは付かぬ、え、儘よ何事も憂世の中と、情に追つた一人の頬には、熱い涙。

『おとはさん。』『愛次郎さん。』今更何と取返しは付かぬ、え、儘よ何事も憂世の中と、情に追つた一人の頬には、熱い涙。

## 選受賞者

- |            |                                  |
|------------|----------------------------------|
| 第一等 (金貳拾圓) | 佐賀市興賀町拾貳番地<br>金澤市野田寺町五丁目四番高島伸次郎方 |
| 第二等 (金拾五圓) | 長谷川浪道三氏<br>東京神田區猿樂町一丁目五番地猿澤方     |
| 第三等 (金拾圓)  | 平山壯太郎氏                           |



## 社會の害毒物

桂濱月下漁郎

男子にも乳房あるを見れば、造物者にも、かんちがひなしとせず。神ならぬ人類の作れる社會に、無用物、もしくば害毒物多きも、亦怪しみに足らず。人を射むとする者は、先づ馬を射よ。無用物は、ここに言はず。害毒物も、そのおもなる物について言はむ。之を社會の内容、即ち思想に觀む乎。最も害毒を流すものは、個人主義也。余は幾千萬年の昔、人間が利己一方の動物たりしことを否定する者に非ず。然れども、人は自から社會を形作らざるを得ず。既に社會を成せる以上は、個人的性情と共に、社會的性情の

發達するも、亦自然の勢也。即ち人は孤立的動物としての性情を有するのみならず、社會的動物としての性情を有す。唯その稟性に厚薄あり。故に聖人教へて曰く、君に忠なれと。子を愛せよとは教へざる也。親に孝なれと。女房孝行なれとは教へざる也。人誰か妻と子とを愛せざらむや。千萬人中時に例外あるは、その然るべき事情ある也。必ずしも之を知れるに、世の最も教育の理、三尺の童子もなほ之を知れるに、世の最も教育凡そ人として自惚なきはなけれど、才のすぐれたる者也。人は一面に己れを離るゝと能はず。されど、他とあるは何ぞや。曰く、慾におはるゝ也。

我執となり、唯我獨尊となり、終に極端なる個人主義となる。これ其人の進歩上、技能上、事業上、利益上を與ふると大なるものなれども、一方には、往々社會的動物たるの域を蹂躪す。彼等はその才能の非凡なるを自覺す、而してこれ社會の賜物なるを知らざる也。彼等才能を持むの餘り、眼中、人なし。横着となり、一人の